

編集後記

発刊の辞にも書いたように、本誌を先ず早期胃癌の診断シリーズの1から始めることにした。

創刊のための倉皇の間であって、無理に執筆をお願いした執筆者各位の御協力に対し先ず心から感謝したい。もち論全執筆者はその方面の第一人者揃いであるので、当方の無理をよく聞いて下さって短時日の間にこれだけの原稿を送っていただいた。有難いことであり、また誇ってよいことと思う。むしろ毎号こんなに珠玉篇ばかり出していたのでは、息切れがしてしまいそうである。したがって、今後はできるだけ長期計画をたてて、症例、座談会、技術解説、文献などなどの欄をもうけ、ゆったりした紙面にしたいと考えている。その方がまた気楽に電車の中でも読んでいただけるはずである。

もともと本誌には臨床家の実用ということを目的一つにしているのですが、グラフィ的な要素がきわめて大きい、その意味で写真の鮮明さに心を用い、また多数のカラー写真を挿入するように企画した。これは大きな経費を要するが、それも敢て踏みきることにしたのは、私ども一同のみなみならぬ決意を表わしたものと考えていただきたいと思う。500円という雑誌代も高すぎるという危懼が強かったが、それでも実際はなかなか採算がとりにくいという。しかしカラーをぬきにして早期癌はあり得ないのである。

この文を書く明日から春の学会シーズンが始まる。今年から学会をサボルことが出来なくなったというのが編集同人たちの声である。いい報告を落さないように拝聴して、早速執筆をお願いしなければならない。そしてまた喜んで執筆していただけるような雑誌にしなければならないというわけである。桜花爛漫の春を他所にして、スライドに明け暮れる会場の中でこんな思いに浸りながら演者の1年間の精進のあとを探ることができるのもまた大きな喜びの一つであろう。

<村上忠重>

<編集> 早期胃癌研究会